

懸賞論文 「社会の安全と日本人の倫理」を いかに考えるか

日本人のモラル崩壊現象に歯止めをかけるための方策を探ろうと、財団法人・公共政策調査会と警察大学警察政策研究センターは「社会の安全と日本人の倫理」をいかに考えるかをテーマに懸賞論文(警察庁、読売新聞社後援、社会安全研究財団協賛)を募集し、このほど入選作が決まった。最優秀賞に選ばれた論文の要旨と、作品全般の講評を紹介する。



香川県生まれ。同県立高松東高校卒業。1987年3月、同県警観音寺署に配属される。四国管区機動隊香川中隊第一小隊長などを歴し、2004年4月から高松南署刑事課強行犯係長。「香川掃除に学ぶ会」の世話人会メンバー。剣道4段。

新聞に凶悪犯罪の記事が載るたび、「日本はなぜ、こんな風になったのだろう」と考えさせられる。刑事という仕事柄、日本人の倫理観を見直し、何がいけないのか、どこが昔と変わったのかを考える必要があると思う。

◆他人への無関心

親身になって、他人の子にも注意する大人の姿を近年見ない。昔、近所にいたガンコ親父たちは、どこに行っていたら。若者に注意すれば、オヤジ狩りでも遭いかねない現在、国民一人一人が他人に無関心すぎると思う。そんな無関心が社会を変えてしまったのではないだろうか。

◆家庭教育の低下

幼いころ、田舎の旧家で育った。夕食は家族全員がそろい、家長である祖父の話が聞

◆急速な利便性の追求

日本人的モラル崩壊を考えると、近所の子どもを人生にまきこみお世話する、おせっかいな人間でありたい。日本人のモラル崩壊を考えると、パソコンやゲーム機など、子どもを取り巻く環境の変化も見逃せない。現実とゲームの世界の区別がつかず、命を粗末にする子どもが増えている。急激に利便性を追求した結

『感動する心』が明るい社会を造る

最優秀賞

警察官 國方卓さん 39 (高松市)

あいさつが生む規範意識

果、子どもの心まで変えてしまったのではないだろうか。

人に近づくための努力も、規範意識の欠如した子どもたちには必要ではないか。

◆尊敬する人物

私は以前、機動隊の小隊長として「いかに部隊を強くするか」を考えていた。その時、麻雀(マーじゃん)無敗伝説を持つ桜井章一さん(雀鬼流麻雀道場「雀鬼会」会長)の存在を知った。

◆あいさつの重要性

そんな子どもたちを、どうやって他人とふれ合つかを教える時、ありきたりだが、「あいさつ」から始めるべきだと思っている。

と声を掛けられるだろうか。「不審者と思われなかつたら不安がある」とも、信念と正義感があれば、吹き飛ばす。通勤者に敬礼する警察官のような信念があれば、子どもも保護者もきっと感謝するだろう。

明い社会ができ、安全を取り戻せるだろう。

◆心のすさんだ青年

「(三五館)を読み、「雀鬼会」では、麻雀そのものを教えることは少ない。挨拶をする、時間を守る、といった日常の生活態度を仕込むほうが多い。日常生活の当たり前を、いいかげんさが、麻雀に出てくるからです」との記述に驚いた。「麻雀20年間不敗」の

ある日、その青年が事件の被疑者として逮捕され、私が

桜井さんは麻雀でも日常生活でも汚い手を使つて嫌う。そして勝負に負けない。しかし、勝つことより強さを求める。その考え方に共鳴し、尊敬するようになった。

桜井さんに会う機会があった。そのすいそを肌で感じた。桜井さんは、権力者を褒めな

私をすいそい気持で受け入れてくれたのが鍵山さんだ。鍵山さんには「ひとつ拾えば、

取り調べるようになった。青年は「好きにしろ、何もやっていない」と否認した。彼は幼少のころ両親と別れ、祖母に育てられた。私は、この青年の心をなんとか開けないかと考え、突破口を見つけたため、彼の言い分を聞くことに徹した。

いが、唯一尊敬する企業家が、大手カー用品会社の創業者、鍵山秀三郎さんだ。その2人の講演が東京であること知り、行くことにした。

鍵山さんは、大企業のトップでありながら、約45年間も公衆トイレなどの掃除を続ける掃除の達人で、その掃除哲学に学ぶ会「日本を美しくする会」の相談役だった。講演に感動し、深夜にこそその職場のトイレ掃除をして、その奥深さに気付いた。

あいさつやゴミ拾いをする勇氣が持てれば、自然と「恥を知る」という日本の文化に気が付き、他人に迷惑をかけるいよつになる。法律の順守やモラルの向上にもつながり、日本人の倫理観の改善にも役立つはずだ。

◆本がもたらした効果
私は、そんな彼に鍵山さん

達人が、道を極める上で、あいさつを重視しており、考えさせられた。

私の通勤途中にある交番では、毎朝、立番をする青年警察官が、通勤者一人一人にしっかりと敬礼をして、「おはようございます」とあいさつしている。皆、恐縮しながらも、きつんと返答している。心を込めたあいさつから始まる。その地域の質が上がり、規範意識も向上するに違いない。

◆子どもに注意の声を
昔のガンコ親父とは言わないまでも、近所の子どもも、私たちが「あやむい」になら

◆本がもたらした効果
私は、そんな彼に鍵山さん

尊敬する2人の共通点は、汚いことを卑しいことを嫌う点だ。私も、鍵山さんの著書を読み、トイレ掃除に参加するようになった。尊敬できる

私たちが「あやむい」になら

私は、そんな彼に鍵山さん

私は、そんな彼に鍵山さん

刺青の青年を更生させた心温まる激励

の著書「あとからくる君たちへ伝えたいこと」(致知出版社)を読んだことを薦めた。「どうしたら自分の人生がよくなるか」「あとに生まれてくる人のため、何が出来るか」を考える話構成で、中学生向けの講演を文章にした本だ。

私は、鍵山さんからの本に「心温かきは万能なり」と書き込みを頂いたことがあった。その時、鍵山さんから「心のすさんだ人に、『人からありがと』と言われてみませんか』『言いつてあげてください』と語りかけられた。

そんな話をして本を手渡すと、彼は「時間くらい、じっくりと読み、ホッリと言った。『この本に書いてあること、何一つおれにはできていない』。その目は、涙が浮かんでいて、そして、『ごめん』と、私がやりました」と言っていて、全面的な自供に転じた。一冊の本がもたらした効果は絶大だった。

◆更生に向けて

本を読み終わった彼に、私が「香川掃除に学ぶ会」に参加していると話すと、「私も参加できるよ」となれました。「か」と真剣に聞いてきた。少し考えて、私は一言だけ、こう言った。「それは、君次第だ」

それから彼は少しずつ変わっていった。刑事たちにおいさすするようになった。彼女と祖母にも、面会で「ごめん」と謝罪し、「ありがとう」と感謝の言葉を伝えた。2人は、彼の顔つきが少年のうちに変わっていき、驚きを見せた。彼は更生に向けて

の道を歩みつつあった。

◆感動する心

彼との出会いを、私は香川県の観音寺市立栗井小学校で、掃除に学ぶ会が終わった後、小学生を含む参加者の前で話した。

鍵山さんにも手紙に書き、伝えた。すぐに届いた鍵山さんからの返事には、「感動しました。本当に感動させられました」との書き出しで彼への心温まる激励がつけられていた。私は、鍵山さんから手紙が届いたと、彼と、彼の彼女に知らせた。

しばらくして、鍵山さんから私に2通の手紙のコピーが送られてきた。彼と彼女が鍵山さんにあてた感謝の手紙のコピーだった。これまで読んでいたような手紙よりも心がこもっており、涙が止まらなくなりました。私自身も感動する心が芽生えたに違いないと気付いた。

◆明るい社会を造る

彼が署からいなくなり、掃除に学ぶ会の会員の一人が「先日、鍵山さんが、九州で行った講演で、刑事さんからの手紙を読み上げました。百数十名の聴講者が感動していました」と知らせてくれた。

大変驚いた。一人の青年が立ち直る話が、他県で「感動する心」を伝えたというのだ。明るい社会を進めることにつながったのではないかと思えた。

【全文はホームページ「読売新聞」(http://info.yomiuri.co.jp/rel ease/)に掲載】

「大事なこと」体験を基に指摘

その他の入選作品(敬称略)

- 【優秀賞】
 - ▷「地域コミュニティによる犯罪抑止施策と警察活動」
岩手県矢巾町 警察官 斎藤重政 (51)
 - ▷「倫理・道徳観を正し、犯罪を減らす方法」
仙台市泉区 主婦 鈴木富貴子 (56)
- 【佳作】
 - ▷「非難の国から感謝の国へ」
岐阜県多治見市 喫茶店経営 栗山隆治 (42)
 - ▷「岐路に立つ日本社会とあるべき倫理～二つの事案をめぐって～」
千葉市中央区 警察職員 高山秀幸 (45)
 - ▷「少年事件の背景と倫理観の変化について」
福島県郡山市 無職 栢沢巳知夫 (77)
 - ▷「わが国の『かたち』をとりもどそう～武道のすすめ～」
東京都新宿区 警察庁技官 真砂威 (60)

◇選考委員(五十音順、敬称略)◇
小野正博(警察大学校警察政策研究センター所長)、熊谷一雄(日立製作所特命顧問)、五阿弥宏安(読売新聞東京本社社会部長)、櫻井敬

子(学習院大学教授)、竹花豊(警察庁生活安全局長)、成田頼明(横浜国大名誉教授)、前田雅英(首都大学東京教授)、山田英雄(公共政策調査会理事長)

応募103編 具体的提言多く

今回の応募数は前回を31編上回る103編だった。犯罪の増加やマナーの乱れを憂慮し、道徳教育やしつけのあり方を多様な観点からとらえた具体的な提言が数多く寄せられた。

性別では男性が86人、女性が17人。年齢別では、50歳代が26人(25%)、最も多く、続いて20歳代が24人(23%)、30歳代が17人(17%)と若い世代の応募者も目立った。

選考委員会は昨年12月上旬に東京都内で開かれ、予備審査で絞り込まれた8編を対象に、内容の妥当性や論理の進め方などに主眼を置いた審査が行われた。選考委員の半数以上が高評価した國方さんの論文がまず最優秀賞に決まり、続いて優秀賞2編、佳作4編が選出された。

授賞式は19日、東京・千代田区のグランドアーク半蔵門で開かれる。入選作品を含む約20編の応募論文集は3月末を境に公共政策調査会(☎03・3265・6201)から発行される。

そして、現職の刑事として一人の青年と向き合った経験や、トイレ掃除の実践を通じて、「まず、何をなすべきか」を考えると、文章には、他人に対する責任の所在を明確にする必要が感じられる。企業には、利益の追求だけでなく、観的な行為規範でもある。企業には、利益の追求だけでなく、観的な行為規範でもある。企業には、利益の追求だけでなく、観的な行為規範でもある。

いづれも大上段に構えること、多くの人がとって、今や倫理というものを考える機会が、あまりないのではないだろうか。倫理という言葉から受ける印象は、道徳のイメージも重なって、説教くさいような、うとうとした感じがする。こうしたイメージが、恥ずかしくもあいて、倫理をまじめに語ることが求められるように思われる。

櫻井 敬子
(学習院大教授)

論文を読んで



作品を審査する櫻井教授

戦後の民主化は、多様な価値観を許容する自由な社会をもたらしたが、同時に、かつては明らかだった善悪の区別まで相対化してしまっただけで、道徳、良心といった言葉が表裏をなしている「大事なこと」とは何だろうか、改めて問うてみたい。